

滋賀県のスモン検診の現状と学生教育

山川 勇 (滋賀医科大学脳神経内科)

田村 亮太 (滋賀医科大学脳神経内科)

矢端 博行 (滋賀医科大学脳神経内科)

塚本 剛士 (滋賀医科大学脳神経内科)

小橋 修平 (滋賀医科大学脳神経内科)

小川 暢弘 (滋賀医科大学脳神経内科)

北村 彰浩 (滋賀医科大学脳神経内科)

真田 充 (滋賀医科大学脳神経内科)

漆谷 真 (滋賀医科大学脳神経内科)

研究要旨

スモン患者の高齢化に伴い、スモン検診の受診率が低下しているが、滋賀県では平成 23 年度以降、病院検診に加え県内の検診担当者に対して各所轄保健所職員の家庭訪問による直接面接を行っている。令和 2 年度、3 年度はコロナ感染の危険から病院検診は中止し、同意を頂いた患者のみ保健師の直接面接を行った。令和 4 年度は病院検診を再開したところ、5 人が保健師による直接面接を行い、その中の 2 人は病院検診も行うことができた。調査票の回収率は令和 2 年までは概ね 90% 程度を維持できていたが、令和 3 年度は回収率 67% と低下を認めたが、令和 4 年度は 100% に改善した。また令和 4 年度に直接面接を行った 5 名に対して平成 23 年度からの Barthel Index また介護区分の変化を分析した。Barthel Index は合計 90 点以上の高い水準を保つ 3 名、点数が著明に低い認知機能低下を認める 1 名、点数が低下傾向である 1 名に分かれた。Barthel Index が著明に低い 1 名と点数が低下傾向の 1 名は介護保険を申請しておられ、2 名ともに介護認定の区分は自分の状態として妥当であると考えられていた。令和 3 年度に患者より手記を頂く機会があり、その内容から医療者のスモンについての知識の乏しさを痛感した。医療者への啓蒙の重要性を感じ、臨床実習の医学科 4~5 回生に対し令和 3 年度から少人数講義を開始した。医療者がスモンの知識を深め、同患者に対してしっかりと対応ができることを目指し、今後も引き続き少人数の講義を続けていきたい。

A. 研究目的

スモン患者の高齢化に伴い、スモン検診の受診率が低下している。滋賀県では病院検診に加え、各所轄保健所職員による直接面接によりスモン現状調査票のうち記入可能な項目についての調査を行っている。令和 2 年度、3 年度はコロナ感染のために病院検診を中止しており、検診の受診率の推移を検討した。また令和 4 年に直接面接もしくは検診を行った 5 名に対して平

成 23 年度からの Barthel Index また介護区分の変化について分析した。また令和 3 年度はスモン患者 1 名より手記を頂いた。手記内容から医療者の疾患に対する理解不足により精神的・肉体的にも過分なご負担を受けられた実際の声を知ることができ、医療者への啓蒙の重要性を改めて実感し、臨床実習中の医学科 4~5 回生に対し 1 グループ 4~5 人の少人数講義を行った。

当院の臨床実習は、医学科の 4~5 回生の 4~5 人が

2週間毎に各科をまわり病院で実習を行うため、医師になる直前のタイミングでの少人数講義であり、全体講義よりも定着がよいと考えた。

B. 研究方法

平成23年度～令和4年度において、滋賀県健康福祉部障害福祉課に依頼して各所轄保健所職員による直接面接にて取得したスモン現状調査個人票のうち可能な項目を記入いただき回収した。令和元年度までは希望者に対し病院での外来または入院での検診を行ったが、コロナ禍で令和2年また3年度は病院検診を中断していた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。令和4年度から希望者に病院検診を再開した。直接面接を行った5名の平成23年度からのBarthel Indexを分析し、また介護申請をされている2人に対して介護区分の変化を分析した。

さらに、滋賀医科大学脳神経内科で今年度から臨床実習を受ける4～5年生に対して、1グループ4～5人の少人数講義を14グループの合計65人に患者手記や文献⁷⁾などを参考に講義資料を作成し講義を行った。講義前にスモンに関する知識を確認し、その程度につい

て検討した。

C. 研究結果

調査票回収率は、平成28,29年度は100%に達したが、平成30年度・令和元年度・令和2年度は90%、令和3年度の回収率は67%と経年的に低下した。しかし令和4年度は回収率を回復することができ、また病院での検診も行うことができた(図1)。

令和4年度の保健所職員による直接面接の対象者は女性3名、男性2名の計5名で、年齢の平均は80.6(63～91歳)、その中の5名に面接を実施できた。また2人は病院検診も実施できた。

Barthel Indexは合計90点以上の高い水準を保つ3名、認知機能低下を認め点数が低下し続けている1名、80点前後で推移していたが本年は低下傾向にある1名に分かれた(図2)。2名が介護保険を受給者し、認定区分は自分の状態と比べ妥当と考えていた。

医学科4～5回生への少人数講義を行うにあたり、講義の前にスモンを知らない方は17人/65人(26%)、少しでも知っている方は35人/65人(54%)、良く知っている方は13人/65人(20%)と知らない方が多くみられた(図3)。しかし、昨年は知らない方は11人/18人(61%)であったことから改善を認めていた。

症状、薬害の経緯、医療費の公費負担・研究班、さらに患者の手記を交えて講義を行ったところ、講義した学生から、手記などを通じ、症状、様々な苦痛、医療費について知ることができたなどの感想が得られた。

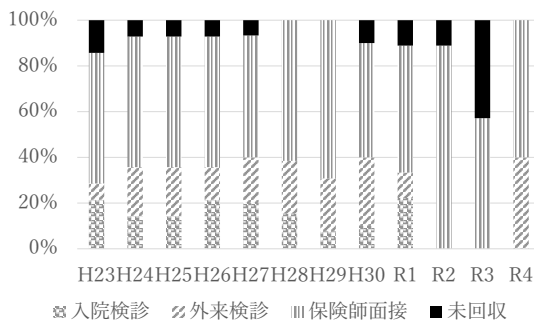


図1 調査回収率とスモン検診受診率の推移

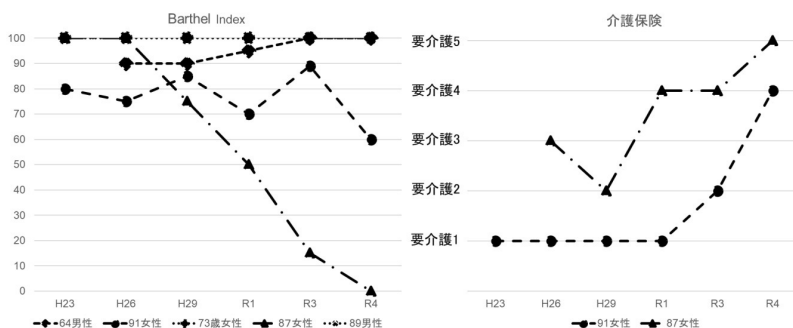


図2

合計90点以上の高い水準を保つ3名、認知機能低下を認め点数が低下し続けている1名、80点前後で推移していたが本年は低下傾向にある1名に分かれた。

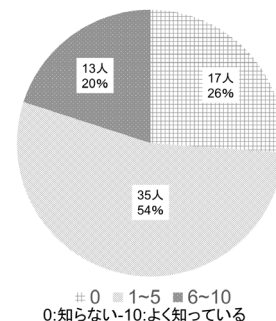


図3

講義の前にスモンを知らない方は17人(26%)、少しでも知っている方(1～5)は35人(54%)、良く知っている方(6～10)は13人(20%)であった。

D. 考察

直接面接方式により調査票の回収率は高い水準を維持していたが、昨年度は回収率の低下が目立ったが、本年度では改善を認めた。理由として滋賀県のスモン患者の全体の数が減少したが、ADLが保たれている方また施設入所中の方が主となり直接面接を受けて頂いた。コロナ禍の状況がすこし改善したことも要因である。ただし、移動が難しい患者が、検診を受ける代わりに、保健所職員の家庭訪問による直接面接でスモン現状調査票を作成することは、スモン患者の現状を把握するために非常に有効な手段と考える。

介護保険は Barthel Index の低下し続けている 1 名と 80 点前後推移していたが本年低下傾向であった 1 名の 2 名が受給し、認定区分は自分の状態と比べ妥当と考えておられた。本検診は現在の状態に見合った介護区分かどうか確認できる貴重な機会である。

さらに学生講義ではスモンについての知識の乏しさを実感したが、昨年より知っている学生が増えていた。今回の学生が 3 年生の時の神経の講義の中でスモンについて話をすることがあったこと、また薬害の講義の中でスモンについて説明をうけていたことが改善につながったのかもしれない。風化防止のみならず、現在困られている患者への対応のあり方も含め、医療者への啓蒙は重要であり、学生が医師のなった後も、スモン患者に十分な対応ができるように学生教育を続けていきたい。

E. 結論

高齢化が進んで ADL が低下し、移動が困難となったスモン患者の現状を把握するためには、保健所職員の訪問による直接面接が有効である。また本検診は患者の現状を適切に反映した介護区分か否かを確認できる指標としても有用である。さらに風化防止のみならず、現在困られている患者に医師が適切に対応出来るためにも学生教育は重要であり継続が必要と考えられた。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 園部正信ほか：滋賀県におけるスモン現状調査：行政との連携により調査票回収率向上と入院診療による QOL 向上が得られた 3 例，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 23 年度総括・分担研究報告書，p65-68，2012.
- 2) 廣田伸之ほか：滋賀県におけるスモン検診の現状について，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 27 年度総括・分担研究報告書，p 108-110，2016.
- 3) 廣田伸之ほか：滋賀県におけるスモン検診を補完する看護師・保健師による全例面接調査の取り組みについて，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 29 年度総括・分担研究報告書，p 111-113，2018.
- 4) 山川勇ほか：滋賀県におけるスモン検診の現状，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 30 年度総括・分担研究報告書，p 97-99，2019.
- 5) 山川勇ほか：滋賀県におけるスモン患者また検診の現状，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 令和元年度総括・分担研究報告書，p 111-113，2020.
- 6) 山川勇ほか：滋賀県のスモン検診の現状と学生教育，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 令和 3 年度総括・分担研究報告書，p 107-109，2021.
- 7) 小長谷正明：スモン キノホルム薬害の現状，Brain and nerve, 67, 49-62, 2015.

滋賀県健康医療福祉部障害福祉課、大津市保健所、草津保健所、東近江保健所の皆様のご協力に感謝いたします。